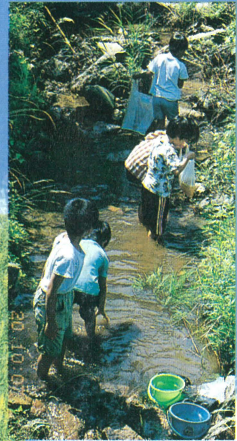


央道町ふるさと文庫16

ふるさと探検ブック



ふるさと学習マップ

番号は目次に
対応しています

湖と森の文化体験ゾーン

- 9 菟古館
- 10 昭和新田
- 11 来待川
- 12 木幡山荘
- 13 ふるさと森林公園
- 14 古墳の森
- 15 岩屋寺の植物群
(鳥根県立穴道湖自然館)

石の文化体験ゾーン

- 1 来待ストーン
- 2 来待石採石場跡
- 3 久戸千体地蔵
- 4 岩屋寺の石仏
- 5 伝大野次郎左衛門墓
- 6 女夫岩遺跡
- 7 穴道要害山古墳
- 8 石宮神社

古墳文化体験ゾーン

- 16 横田古墳
(来待ストーン内)
- 17 大野原古墳
- 18 伊賀見古墳群
- 19 椎山古墳群
- 20 下の空古墳群(民家内)
- 21 岩穴口古墳
- 22 水溜古墳群
- 23 穴道要害山古墳
- 24 随音寺横穴墓群

モデルコース

1 古墳の文化体験コース

- 菟古館(ふるさと学習センター) → 随音寺横穴墓群
- 穴道要害山古墳 → 水溜古墳群(古墳の森)
- 椎山1号墳 → 伊賀見1号墳
- 横田古墳(来待ストーンミュージアム)

2 石の文化体験コース

- 来待ストーンミュージアム → 来待石採石場跡
- 久戸千体地蔵 → 岩屋寺の石仏群
- 伝大野次郎左衛門墓 → 石宮神社
- 女夫岩遺跡 → 穴道要害山古墳
- 菟古館(ふるさと学習センター)

3 中世・近世の歴史体験コース

- 菟古館(ふるさと学習センター) → 穴道要害山城
- 金山要害山城 → 山陰道遺跡
- 伊賀見一里塚 → 塩治判官高貞の碑

風土記時代の歴史体験ゾーン

- 25 猪石・犬石(石宮神社)
- 26 穴道駅(推定)
- 27 山田村(菅原地区)
- 28 和奈佐山(推定)
- 29 幡屋山(馬鞍山)
- 30 来待橋(推定)
- 31 支麻知社(来待神社)
- 32 狭井社(佐為神社)
- 33 宇由比社
(宇由比神社)
- 34 伊自美社(伊基神社)

中世・近世の歴史体験ゾーン

- 35 塩治判官高貞の碑
- 36 金山要害山城
- 37 佐々布要害山城
- 38 穴道要害山城
- 39 山陰道(一部推定)
- 40 伊賀見一里塚

文化財体験ゾーン

- 41 伊賀見一里塚
- 42 (重文) 木幡家住宅
- 43 伝出雲土銅鐸
(木幡家銅鐸)
- 44 椎山1号墳
- 45 女夫岩遺跡
- 46 飛雲閣
- 47 木造阿彌陀如来像
- 48 木造阿彌陀如来像
- 49 木製波清文透彫欄間
- 50 輪転式一切経蔵
- 51 政慶遺物九条大袈裟
- 52 犬石、猪石
- 53 伝大野次郎左衛門墓
- 54 木幡山荘
- 55 三条宗近銘太刀
- 56 伊賀見1号墳
- 57 久戸千体地蔵
- 58 金山要害山
- 59 菅原天満宮
- 60 岩屋寺
- 61 妙岩寺
- 62 水溜古墳群
- 63 随音寺横穴墓群
- 64 来待石の採石場
- 65 穴道町菟古館
(ふるさと学習センター)
- 66 来待ストーンミュージアム

凡例

- 石の文化体験ゾーン
- 湖と森の文化体験ゾーン
- 古墳文化体験ゾーン
- 風土記時代の歴史体験ゾーン
- 中世・近世の歴史体験ゾーン
- 文化財体験ゾーン

は じ め に

このブックレットは、宍道町に残された文化遺産や自然環境を、直接“見て学ぶ”ために編集された「ふるさと学習」のためのガイドブックです。

私たちの宍道町には、地球の誕生以来、約47億年かけて形づくられた自然環境の上に、人々がこの地に住み始めて以来のくらしのあとが数多く残されています。この町に残されている多くのことを見たり、聞いたり、調べたりすることで、学校で勉強する教科書だけではよく分からなかったことや、この地に住んだ多くの先人たちのあゆみを少しずつ理解できることでしょう。

表紙の裏には、このブックレットで紹介する場所を地図で表しています。また、行くのが難しそうな場所には、本文中に詳しい地図もつけました。さらに詳しく知りたい人は、本の最後につけた参考図書を読んだり、宍道町内の博物館（宍道町菟古館、来待ストーン）や教育委員会の専門調査員などに聞いてみてください。

宍道という地名は、今から約千三百年前に作られた『出雲国風土記』にその由来が記されており、それにまつわる遺跡も残っています。こんな町は全国を探してもありません。みなさんの力で、今まで知らなかった宍道のことを、もっともっと発見してみましょう。

宍道町教育委員会

目次（番号は表紙裏のふるさと学習マップに対応しています）

ページ

■ 石の文化体験ゾーン

1. 来待石	1
2. 来待石採石場跡（1. 来待石）	1
3. 久戸千体地藏	3
4. 岩屋寺の石仏と植物群	4
5. 伝大野次郎左衛門墓	5
6. 女夫岩遺跡	5
7. 宍道要害山古墳	7
8. 石宮神社の犬石・猪石	8

■ 湖と森の文化体験ゾーン

9. 菟古館	9
10. 昭和新田	10
11. 来待川	11
12. 木幡山荘	12
13. ふるさと森林公園	13
14. 古墳の森	15
15. 岩屋寺の植物群（4. 岩屋寺の石仏と植物群）	4

■ 古墳文化体験ゾーン

16. 横田古墳	17
17. 大野原古墳	18
18. 伊賀見古墳群	18
19. 椎山 1 号墳	21
20. 下の空古墳	22
21. 岩穴口古墳	23
22. 水溜古墳群 (14. 古墳の森)	15
23. 宍道要害山古墳 (7. 宍道要害山古墳)	7
24. 随音寺横穴墓群	24

■ 風土記時代の歴史体験ゾーン

25. 猪石・犬石	26
26. 宍道駅	26
27. 山田村	27
28. 和名佐山	27
29. 幡屋山	27
30. 来待橋 (11. 来待川)	11
31. 支麻知社 (来待神社)	27
32. 狹井社 (佐為神社)	27
33. 宇由比社 (宇由比神社)	27
34. 伊自見社 (伊甚神社)	27

■ 中世・近世の歴史体験ゾーン

35. 塩冶判官高貞の碑	30
36. 金山要害山城	31
37. 佐々布要害山城	31
38. 宍道要害山城	32
39. 山陰道	33
40. 伊志見一里塚	33

■ 文化財体験ゾーン

41. 伊志見一里塚（40. 伊志見一里塚）	33
42. 木幡家住宅	35
43. 伝出雲出土銅鐸〔木幡家銅鐸〕	36
44. 椎山1号墳（19. 椎山1号墳）	21
45. 女夫岩遺跡（6. 女夫岩遺跡）	5
46. 飛雲閣	38
47. 木造毘沙門天立像	38
48. 木造阿弥陀如来像	39
49. 木造波濤文透彫欄間	40
50. 輪転式一切経経蔵	40
51. 宍道伊予守遺物九条大袈裟	41
52. 犬石・猪石（25. 猪石・犬石）	26
53. 伝大野次郎左右衛門墓（5. 伝大野次郎左右衛門墓）	5

54. 木幡山荘（12. 木幡山荘）	12
55. 三条宗近銘太刀（51. 宍道伊予守遺物九条大袈裟）	41
56. 伊賀見 1 号墳（18. 伊賀見古墳群）	18
57. 久戸千体地藏（3. 久戸千体地藏）	3
58. 金山要害山城（36. 金山要害山城）	31
59. 菅原道真と天神さん	43
60. 岩屋寺（4. 岩屋寺の石仏と植物群）	4
61. 妙岩寺	45
62. 水溜古墳群（14. 古墳の森）	15
63. 随音寺横穴墓群（24. 随音寺横穴墓群）	24
64. 来待石の採石場跡（1. 来待石）	1
65. 宍道町菟古館（9. 菟古館）	9
66. 来待ストーンミュージアム（1. 来待石）	1

■ 石の文化体験ゾーン

①②④⑥ 来待石

[来待石について]

宍道町来待地区を中心として東西約10km、幅約1～2kmに広がる
^{さがんそう}砂岩層を来待石と呼んでいます。およそ1,400万年前につくられたもの
 で、各種の貝やサメ、デスモスチルス、パレオパラドキシアなどの化石
 もたくさん見つかっています。

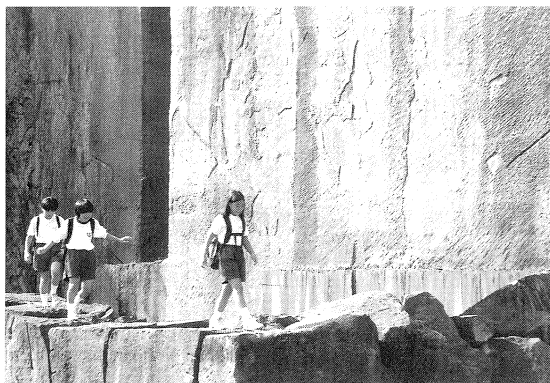
来待石は、採石・加工が簡単で、昔から良質の石材として利用されて
 きました。古くは古墳時代の石棺、
 石室に利用されており、その後も石
 仏、石灯ろう、^{からじし}唐獅子、^{とりい}鳥居、石う
 す、石垣、^{そせき}礎石、かまど、墓石など
 に広く使用されてきました。特に、
 江戸時代には他の藩へ送り出すこと
 が制限されたために、「^{おとめいし}御止石」と
 いう別名も残っています。また、来
 待石の粉は江戸時代ごろから石見地
 方へ送られ、石見瓦などの^{ゆうやく}釉薬とし
 ても利用されました。



石灯ろうを作る

今でも来待石の採石と加工は盛ん

ですが、古くから採石が行われたことから、来待地区を中心に多くの採石跡が残っています。採石・加工は昭和40年代ごろまでは全て手作業による大変な労働でしたが、その後、徐々に機械が導入されるようになりました。来待石の採石・加工については来待ストーンミュージアムで詳しく紹介されています。



来待石の石切り場（来待ストーンミュージアム）



来待石の加工体験
（来待ストーンミュージアム体験工房）

〔来待ストーン〕

来待ストーンは、来待石採石場跡地を利用した公園で、ミュージアム、工房、広場、採石場跡、トンネルなど、来待石を実際に見て、触れて、体験できるようになっています。

【参考】ふるさと文庫3、8、きまち書留帳、歴史叢書1、来待ストーン研究

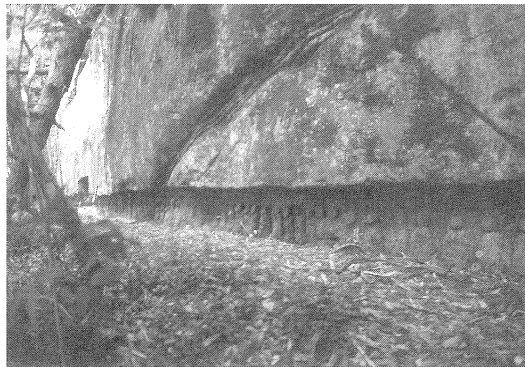
③⑤⑦ くとせんたいじぞう 久戸千体地蔵 (町指定文化財)

宍道湖から来待川にそって、およそ1kmさかのぼると、川の東岸に接する来待石の崖^{がけ}に112体の仏像^{ぶつぞう}が彫りこまれているのが見られます。これを地元では昔より「久戸千体地蔵」と呼んでいます。それぞれの像は、高さがおおよそ50cm前後で浮き彫りされています。

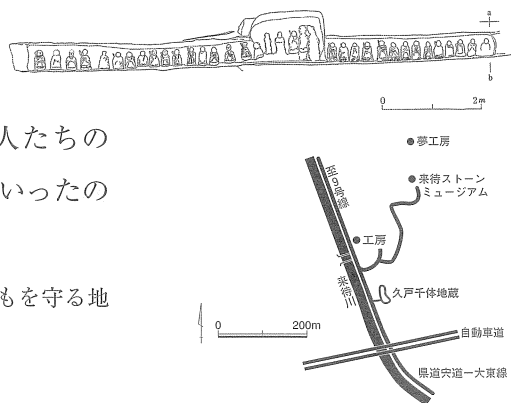
言い伝えによれば、地元^{ちようじや}の長者の建てたものと伝えられていますが、だれが、いつ、なぜ、ここに彫りこんだのかよく分かっていません。しかし、地蔵信仰^{じぞうしんこう}のさかんになるむろまちじだい^{むろまちじだい} 室町時代から江戸時代の

間、ここで生活していた人たちの信仰^{しんこう}によって彫りこまれていったのは間違いないでしょう。

〔地蔵信仰〕 人びとを救い、子どもを守る地蔵菩薩^{ぼさつ}を信仰すること。



久戸千体地蔵



④⑮⑥⑩ いわやじ 岩屋寺の石仏と植物群

岩屋寺は宍道町佐倉地区にある真言宗のお寺で、真言宗大覚寺派に属し、山号を美滝山といます。古い記録は失われていますが、平安時代に始まり、鎌倉時代から室町時代にかけて、大変大きな勢力をもっていたと考えられています。以前は多くの僧侶をかかえていました。

岩屋寺はその名のとおり、周囲を岩に囲まれており、ところどころに來待石などで作られた石仏や石塔などを見ることができます。特に滝や薬師堂の周辺には石仏や石塔が数多く置かれ、昔の面影を残しています。

滝の周辺にはシダ類を中心に、およそ70種類の植物群が見られ、植物学的に貴重な資料だと言われています。



岩屋寺の滝周辺

⑤⑤③ ^{でんおおのじろうざえもんのほか}
伝大野次郎左衛門墓（町指定文化財）

ゴルフ場（玉造カントリークラブ）のある高台^{たかだい}を大野原^{おおのばら}といいます。
この高台にある県立わかたけ学園のとなりに、昔より大野次郎左衛門
の墓と伝えられる大きな五輪塔^{ごりんとう}があ
ります。これは来待石でつくられて
おり、^{ひろせちやう}広瀬町^{がっさん}の月山にある初代
^{まつえじやうしゆ}松江城主^{ほりおよしはる}の堀尾吉晴の五輪塔より大
きいもので、おそらく島根県内でも
最大の五輪塔と思われます。

大野次郎左衛門は、今から約400年
くらい前に^{しんじままさよし}宍道政慶（金山要害山の
城主）に滅ぼされた^{おおのむら}大野村（今の松
江市大野町）本宮山城主のことだと
言われています。（見学する時はわか
たけ学園の許可をうけてください）



伝大野次郎左衛門の墓

【参考】ふるさと文庫2、3

⑥ ^{めおといわ}
女夫岩遺跡（県指定文化財）

島根中央家畜市場の北側にある二つの大きな石で、古くから「女夫
岩^{ししいわ}」とも「宍岩」とも呼ばれ、信仰の対象となってきました。

この遺跡は中国横断自動車道の建設予定地となり、取り壊される予定でしたが、『出雲国風土記』に書かれている「猪石」ではないかと、地元の住民や研究者から強い保存の要望があり、そのまま残されることになりました。

遺跡の周辺では発掘調査が行われ、最も古い遺物として古墳時代中ごろ（5世紀ごろ）のお祭り用の土器が見つかりました。

一方、『風土記』の研究家であった加藤義成氏は、「犬石」・「猪石」は石宮神社にある大きな石であると主張されています。昔から「犬石」、「猪石」の所在地については様々な説があります。

参考 『出雲国風土記』より（原文）

ししちのさと ぐうけ まにし
宍道郷。郡家の正西三十七里なり。所造天下大神命の追い給ひし猪
かた
の像、南の山に二つあり。〔一つは長さ二丈七尺、高さ一丈、周り五
丈七尺。一つは長さ二丈五尺。高さ八尺、周り四丈一尺。〕猪を追ひ



女夫岩

し犬の像、〔長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。〕其の形石となりて、猪と犬とに異なることなし。今に至りても猶あり。故、宍道と云う。

【参考】ふるさと文庫11、13、

伝承ししちの里、宍道町史

⑦㉓ しんじようがいさんこふん **宍道要害山古墳**

宍道要害山古墳は、
 宍道要害山^{さんちよう}の山頂にあ
 る全長3.8mの来待石を
 くりぬいためずらしい
 形の横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}です。

人を葬った玄室^{ほうむ げんしつ}は奥
 行1.3m、幅1.85mで横に
 長い形をしており、高
 さは1.35mです。天井^{てんじよう}の

石はすでに失われており、外から
 見るとまるで風呂おけのようです。

玄門^{げんもん}（入り口の門）は四角にくり
 ぬかれています。閉塞石^{へいそくいし}（入り
 口の石）はありません。羨道^{えんどう}（玄

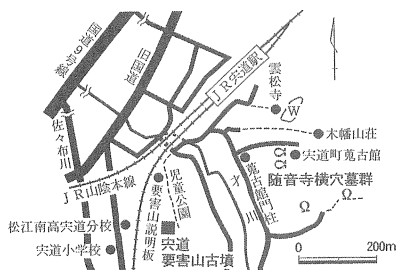
門から玄室まで）は長さ1m、幅0.8mです。要害山が山城として利用
 されると、石室はのろしをあげる場所に使ったと伝えられています。

副葬品^{ふくそうひん}（死者が生前に愛用していた品物）は残っていませんが、造
 られた時期はその形から6世紀の後半と考えられています。葬られた
 人はこの地方の有力な豪族だったのでしょう。

【参考】ふるさと文庫6、歴史史料集（古墳時代編）、宍道町史

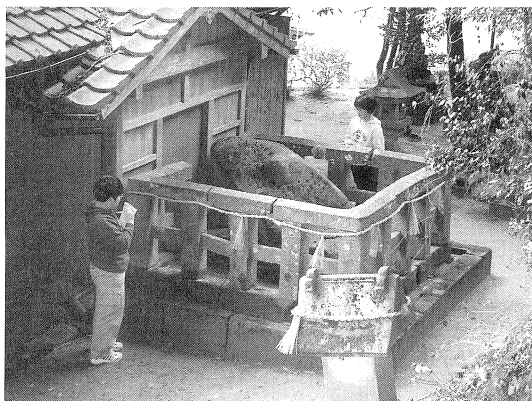


山頂の宍道要害山古墳（右側↓の岩：左は慰霊塔）



⑧ いしのみやじんじゃ いぬいし ししいし
石宮神社の犬石・猪石（町指定文化財）

宍道湖岸より同道川を南にほぼ200mさかのぼった地点にあります。石宮神社は、『出雲国風土記』に書かれた宍道社ではないかと考えられています。祭神は出雲大社と同じく、おおなもちのみこと おおくにぬしのみこと大穴持命（大国主命）をまつています。この神社の鳥居の両側にある大きな石は「猪石」、神社



石宮神社の犬石

の後ろにあるご神体の石は「犬石」の有力な候補です。（⑥女夫岩遺跡を参考にしてください。）

【参考】ふるさと文庫2、11、13、宍道町史



石宮神社の猪石

■ 湖と森の文化体験ゾーン

⑨⑥⑤ しゅうこかん 菟古館

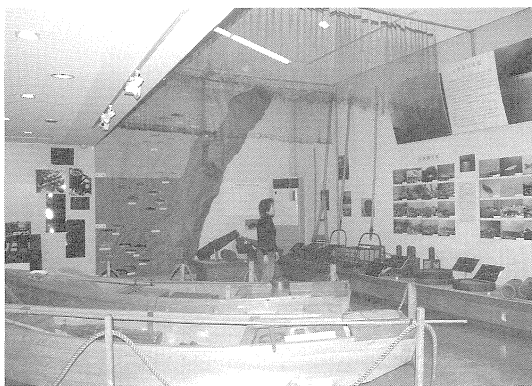
宍道町菟古館は、宍道町の^{こわたけ}木幡家に伝わった美術工芸品と、宍道湖^{ぎょろうぐ}の漁労具を展示する博物館です。宍道町のことを調べるためのたくさんの資料があります。

宍道の木幡家は、江戸時代に歴代の藩主が宿泊・休憩した家（本陣）で、歴代当主の集めた美術工芸品や、宍道を訪れた著名人の作品が残されています。

宍道湖の漁労具は、昭和初期から昭和60年代までに使われたもので、宍道湖漁労具としては最大のコレクションです。



宍道町菟古館



菟古館の展示（宍道湖の漁具）

隣接する木幡山荘^{こわたさんそう}は、木幡家の別荘地として利用されたもので、四季折々の自然が美しい庭園です。(⑫木幡山荘を参考にしてください)

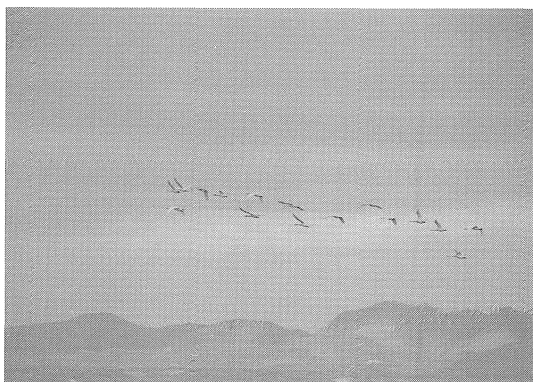
⑩ 昭和新田

第二次世界大戦が終わると、日本は深刻な食糧難^{しよくりょうなん}の時代でしたので、農地を広げて作物の生産を増やすことは多くの人々の願いでした。

昭和25年ごろから新建川河口（現在の昭和新田^{しんたてがわ}）を干拓^{かんたく}する計画がもちあがり、昭和32年から昭和43年まで工事が行われました。完成した約50㍻の水田からはたくさんのお米が生産されるようになりました。



干拓地を利用したマラソン



宍道湖に飛来する白鳥

宍道湖一帯は全国最大級の水鳥^{せいそくち}生息地として知られており、これまでに45科263種が確認されています。宍道湖に生息する鳥類の特徴は、①種類が豊富なこと。②コハクチョウの南限^{とらいち}渡来地となっていること。③ガン類^{ゆいいつ}の西日本唯一の集団渡来地となっていること。④大陸性の鳥類が多く見られることなどです。干拓地では落ち穂をえさにする白鳥の群などを見ることができます。

⑪③⑩ 来待川、来待橋

来待川は和名^{わ な さ}佐地区から流れ始め、菅原^{すがはら}地区を流れて宍道湖に流れる全長7.4kmの川です。

今から約1,270年前の733年（天平^{てんぴょう}5年）に書かれた『出雲国風土記』には、「来待川。源は^{みなもと}郡家の正西二十八里な^{ぐうけ まにし}

る和奈佐山^{わ な さ や ま}より出て、西に流れて山田村^{やまだむら}に至り、更に折れて北に流れて入海に入る。年魚^{いりうみ}あり。」とあります。これは来待川に関する最古の記録です。和奈佐山は今の和名佐地区あたりの山で、山田村とは今の菅原地区のことです。年魚^{あゆ}は鮎^{あゆ}のことで、そのころは貢物^{みつぎもの}の鮎^{あゆ}がと



来待川と菅原地区の集落
（『風土記』では山田村）

れていたことが分かります。

川には昔から来待橋と呼ばれる橋がかかっており、『風土記』には「^{たまづくりのまち}玉作街より西に9里にして来待橋に至る。長さ8丈^{じょう}（23.8m）、幅1丈3尺（3.9m）」と書かれています。

江戸時代には松江藩の政策によって、土手にロウの材料となるハゼやウルシが植えられ、藩の大切な収入源となりました。

【参考】ふるさと文庫13、きまち書留帳、宍道町史

⑫⑤④ ^{こわたさんそう}木幡山荘（町指定文化財）

木幡山荘はJ R宍道駅の南にあたり、宍道町^{しゅうこかん}菟古館^{となり}の隣にあります。ここは^{ずいおんじ}随音寺というお寺の跡と伝えられていますが、今から400年ほど前に木幡家^{べっそうち}の別荘地となりました

木幡家4代目^{じょうい}の浄意^{みょうれん}、妙蓮の夫妻はこの地^{いんきょ}に隠居し、100歳、92歳の長生きをしたことから、代々ここで老後を楽しむようになりました。

また、木幡家の歴代の当主は、詩や歌、音楽、文芸、書道、絵画など風流を好んだため、江戸時代の中ごろから幕末、明治、大正、昭和にかけて^{ぬきなかいおく}貫名海屋^{ひろせきよくそう}、^{そうふうがい}広瀬旭荘^{そうもつがい}、僧風外^{たのむらちよくにゅう}、僧物外^{こてつばい}、^{むなかつしこう}田能村直入^{ふぜい}、胡鐵梅、棟方志功など多くの文人が木幡山荘を訪れています。

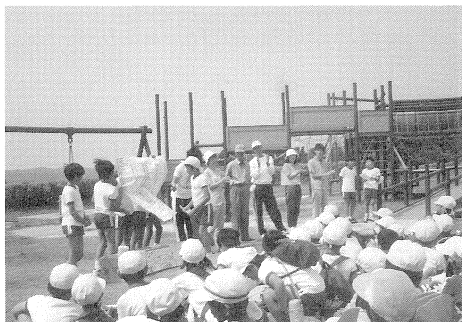
昭和61年に菟古館ができ、その開館にあわせて山荘内の整備をおこない、広く一般に公開されるようになりました。今では四季折々の風情を求めて観光客が訪れます。



木幡山荘

⑬ ふるさと森林公園

ふるさと森林公園は、学習展示館、コテージ、オートキャンプ場、遊具などを備えた自然公園で、宍道湖や簸川平野を見下ろす高台にあります。公園内には水性植物園、湿地植物園などもあり、自然の植物をゆっくりと観察することができます。



ウォークラリーの結果発表



コテージ



森林公園マップ

⑭②②⑥② ^{こふん}古墳の森 ^{みずたまり}(水溜古墳群)

水溜古墳群は大小30基の古墳（前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}1、円墳^{えんふん}13、方墳^{ほうふん}16）からなる宍道町最大の古墳群です。特に、水溜5号墳は一辺25mの町内では最も大きい方墳で、^{はにわ}埴輪をもつ^{にだんちくせい}二段築成の



古墳の模型（歴史の広場）

古墳です。築かれた時期は5世紀ごろと考えられます。



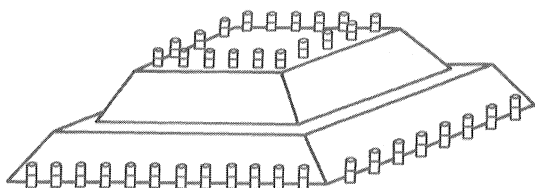
古墳を探検（水溜5号墳）

現在、水溜古墳群の一部を取りこんで宍道総合公園・古墳の森として整備され、約4ヘクタールの敷地が古代生活体験、古墳、歴史の各ゾーンに分けられています。古代生活体験ゾーンの広場にはキャンプ場や高床倉庫風の

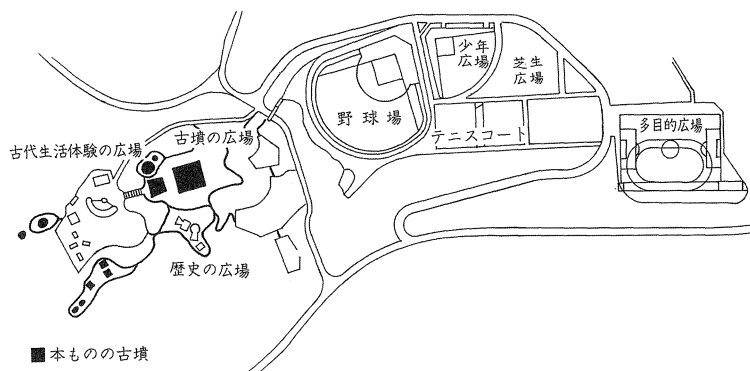
キャビンがあり、古墳の広場では水溜5号墳を中心とする数基の実物

の古墳が、また歴史の広場では日本・島根県・宍道町の代表的な古墳^{もけい}が模型の形で整備されています。

【参考】ふるさと文庫 6、歴史史料集（古墳時代編）、宍道町史



水溜 5 号墳の推定復元図



古墳の森マップ

■ 古墳文化体験ゾーン

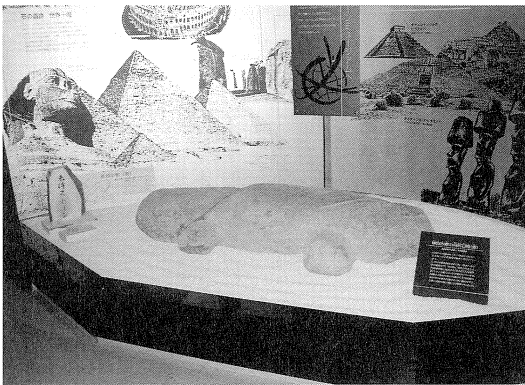
⑩ 横田古墳

昭和62年、^{ほじょう}圃場整備中に ^{うちがたわ}内ヶ峠集落の東側の水田から ^{ふながたせっかん}舟形石棺の ^{ふた}蓋が見つかりました。もともと ^{ふんきゅう}墳丘があったのですが、現在はまったく残っていません。

石棺の蓋は、長さ167cm、幅60cm（頭部）～66cmの大きさで、外面は「板カマボコ」のようにに加工され、内面は2段に彫りこまれています。^{なわかけとつき}縄掛突起と呼ばれる ^で出 ^ば張りが両側に2個ずつ、計4個ついています。石材は玉湯町から宍道町来待にかけて産出される ^{せきえいあんざん}石英安山 ^{がんしつぎょうかいがん}岩質凝灰岩で、地元では通称「^{しらこいし}白粉石」と呼ばれる ^{やわ}柔らかくて白っぽい石です。現在来待ストーンミュージアムで展示されています。

【参考】ふるさと文庫 6、

宍道町史

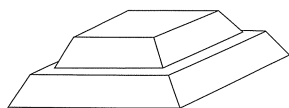


来待ストーンミュージアムで展示されている横田古墳の石棺

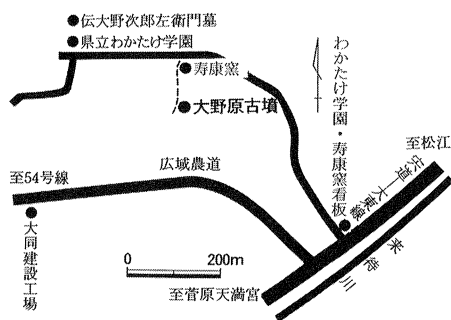
⑪ おおのぼら 大野原古墳

大野原古墳は県立わかたけ学園の南東にあります。大野地区にのびる丘陵の頂の平坦地に築かれた18.5mと19.5mの方墳です。高さは約4.0mで、中段に幅約1.5mの段がめぐっています。（これは二段築成と呼ばれ、大型の墳丘によく見られます。）埴輪、葺石はありません。副葬品は見つかっていません。

なお、地元では首塚と呼ばれており、頂に小さな祠が祭られています。



大野原古墳推定復元図



【参考】ふるさと文庫 6、宍道町史

⑪⑤⑥ いがみ 伊賀見古墳群（町指定文化財）

伊賀見古墳群は下白石地区の低い丘陵の上にあります。伊賀見1号墳は、その中の一つで、内部に「石棺式石室」と呼ばれるこの地方独特の横穴式石室をもっています。昭和33年に発掘調査が行われ、多く



伊賀見 1 号墳の石室

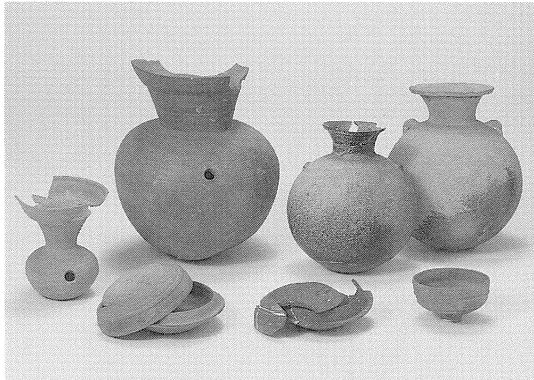
石室は、ほぼ北向きに開口しており、細長い羨道えんどうの奥には死者を葬るほむ玄室げんしつがあります。

石材はすべて来待石きまちいし（凝灰質砂岩ぎょうかいしつさがん）を使用しており、玄室の大きさは奥行き1.8m、幅1.9m、高さ1.7mです。床の中

央部には「U」字の形をした浅い彫り込みをもつ細長い板石ししょう（屍障しきりいし仕切石）がすえつけられています。この仕切石は九州を起源とし、山陰地方の石室にも多く見られるもので、この石室も九州の影響をうけていることがうかがえます。玄室と羨道との間には高さ、幅ともに

の副葬品ふくそうひんが見つかりました。副葬品は現在菟古館に保管されています。

1 号墳の墳丘ふんきゅうは全長約25mの前方後方墳で、白石周辺せんぱうこうえんふんを支配しはいしていた首長しゅちやうの古墳だと考えられています。



伊賀見 1 号墳から見つかった須恵器

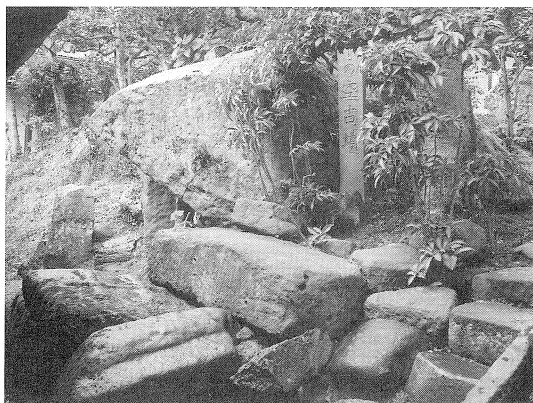
⑳ ^{しも}^{そら} 下の空古墳

下の空古墳はすでに墳丘はなくなっていますが、上白石地区の民家（高木武久さん宅）の庭先にあり、来待石で造られた「石棺式石室」と呼ばれる横穴式石室が残っています。

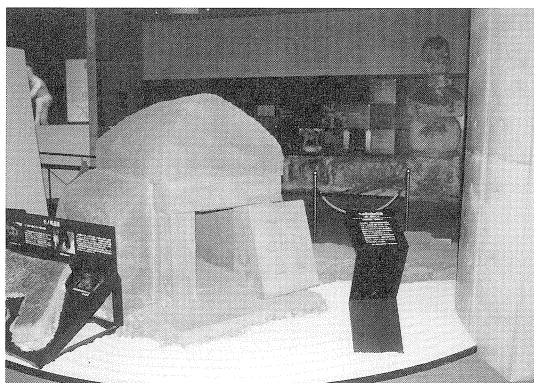
玄室の中には土砂が流れこみ、天井は崩れ落ち、玄門もこわされています。玄室を復元すると奥行き2m以上、幅1.5m以上と考えられます。いずれの壁も1枚石で、天井石は外面が家形に加工されてい

ることが分かります。閉塞石は高さ1m、幅0.8mの切石で、表面には「𪛗」状の陽刻が彫られています。

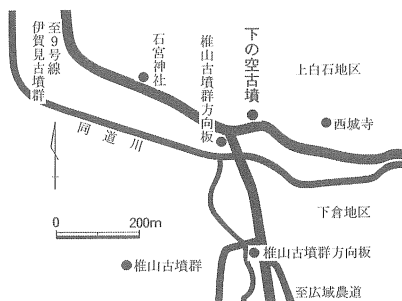
副葬品は残っていませんが、石室の形から、造られた時期は伊賀見



下の空古墳



復元された下の空古墳
(来待ストーンミュージアム)



1号墳より少し遅れる^{おく}
7世紀前半ごろと考え
られます。

【参考】ふるさと文庫6、8、
歴史史料集（古墳時代編）、
穴道町史

②1 いわあなぐち 岩穴口古墳

岩穴口古墳は、穴道中学校南の谷の奥にあります。この古墳は水田に突き出た来待石のかたまりに直接横穴が開けられており、まるで石室が露出しているように見えます。

玄室は奥行き1.5m、
幅約1.6m、天井はかな
り崩れていますが、も
とは整った家形（内部
を家のように掘りこん
だ形）に造られていた
と思われます。床の左
右には遺体を置いた
屍床（ベッド状のもの）
が残っています。

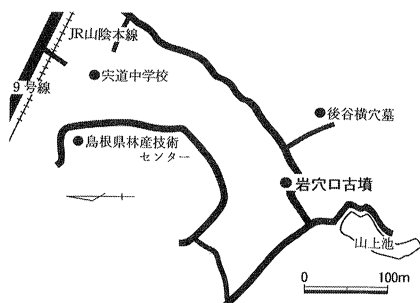


岩穴口古墳

この古墳は、もともと墳丘をもち、盛り土でおおわれていたと考え

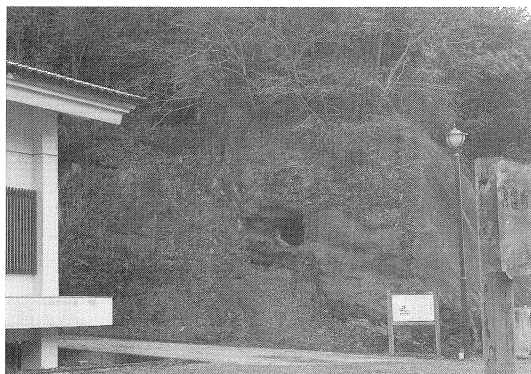
られ、^{ようがいさん}宍道要害山古墳^にによく似ています。

【参考】ふるさと文庫 6、歴史史料集
(古墳時代編)、宍道町史



②④⑥③ 随音寺横穴墓群

^{しゅうこかん}菟古館^{いわはだ}の東側の岩肌にある二つの穴が随音寺横穴墓群です。上にあるものが1号穴で、下にあるのが2号穴です。これらの横穴墓は^{こふんじだい}古墳時代（4世紀後半～7世紀前半）に造られた有力者のお墓で、一つの穴に^{すうせだい}数世代にわ



菟古館横の随音寺横穴墓
(上が1号穴、下が2号穴)

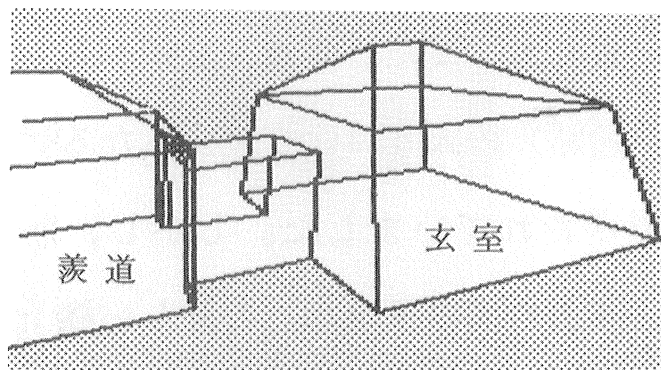
たって葬^{ほうむ}る例もあるので、^{かぞくぼ}家族墓的な性格をもっていると言われています。随音寺横穴墓群は^{いわはだ}岩肌に掘りこんでいるめずらしい例です。

1号穴は岩に家の形をかたどってきれいに掘りこまれており、中からは^{すえきふた}須恵器の蓋が見つかっています。この須恵器は7世紀の初めに作られたものと考えられ、横穴の掘りこまれたのも、そのころのことと

考えられます。

2号穴は昔より子供の遊び場であつたらしく、かなりいたんでいました。

【参考】 ふるさと文庫6、歴史史料集（古墳時代編）、宍道町史



横穴墓の模型図

■ 風土記時代の歴史体験ゾーン

②⑤～③④ ^{いずものくにふどき}『出雲国風土記』の書かれた時代

『出雲国風土記』は733年（^{てんぴょう}天平5年）に作られた古代の地誌です。この『風土記』を読むことで今から約1,270年前の宍道町のことが分かります。

^{いぬいし} [犬石・^{しいし}猪石]

宍道という地名の由来もこの中に記されており、「神様が犬とともに^{しいしが}猪狩りをされた。そのときの犬と猪が石となって今もある。そこで猪の通った道という意味で、^{しいぢ}宍道という。」と



『出雲国風土記』

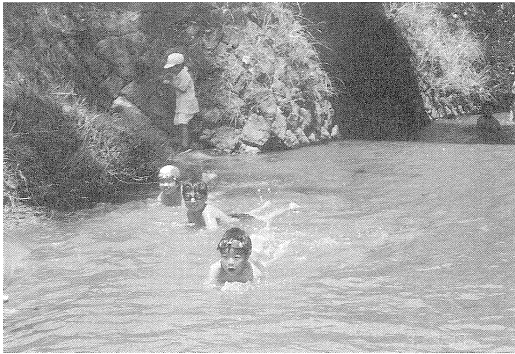
あります。(⑥^{めおといわ}女夫岩遺跡 ⑧^{いしのみやじんじゃ}石宮神社の犬石・猪石を参考にしてください)

^{ししぢのうまや} [宍道駅]

^{くろだのうまや}黒田駅（松江市大草町の国庁と同じ所にあった）から西へ38里（20.3km）いった所に^{しる}宍道駅（宍道町佐々布）があると記されています。

[村]

^{やまだむら}山田村と^{ささふのさき}佐雑埼の名前が記されています。山田村は^{きたてがわ}来待川を説明する中で出ており、現在の^{すがはら}菅原地区の集落です。佐雑埼は現在の^{こざそう}小佐々布地区の集落と考えられ、道の順路を説明する中で出ています。



宍道川（現在の佐々布川）

（佐々布川）の源流として^{しる}記されており、現在の^{まぐらやま}馬鞍山が候補地にあ
げられています。木垣峰は^{ぐんざかい}郡境を説明する中で出ており、現在の^{はちじゅうざん}八重山と考えられています。

〔橋〕 （⑪ 30 来待川、来
待橋を参考にしてください）

〔神社〕

宍道町内の神社とし
て、^{きまちしゃ}支麻知社、^{ししぢしゃ}宍道社、
^{さいしゃ}狭井社、^{さいたかしや}狭井高社、
^{さくたしや}佐久多社、^{うゆいしや}宇由比社、
^{いじみしや}伊自見社の7カ所が記

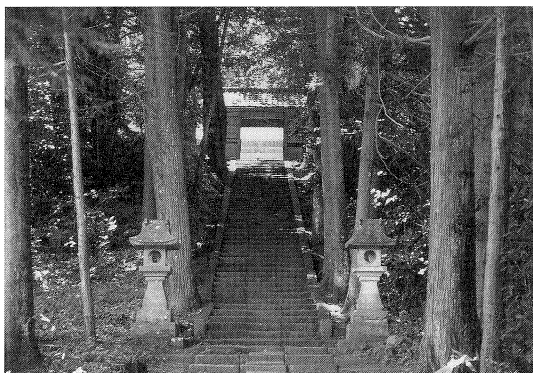
〔山〕

^{わなさやま}和名佐山、^{はたややま}幡屋山、
^{きがきのみね}木垣峰の名前が書かれて
います。和名佐山は来待
川の源流として^{しる}記されて
おり、現在の和名佐地区
の山と考えられていま
す。幡屋山は^{きたてがわ}宍道川



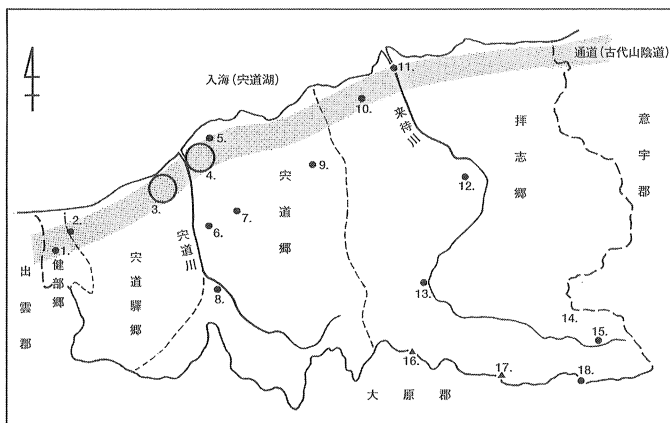
来待神社（来待大森）

されています。支麻知社は現在の来待神社（来待大森）、穴道社は現在の石宮神社（上白石）、狹井社は現在の佐為神社（才）、狹井高社は佐為神社にある佐為高森神社、佐久多社は現在の佐久多神社（佐



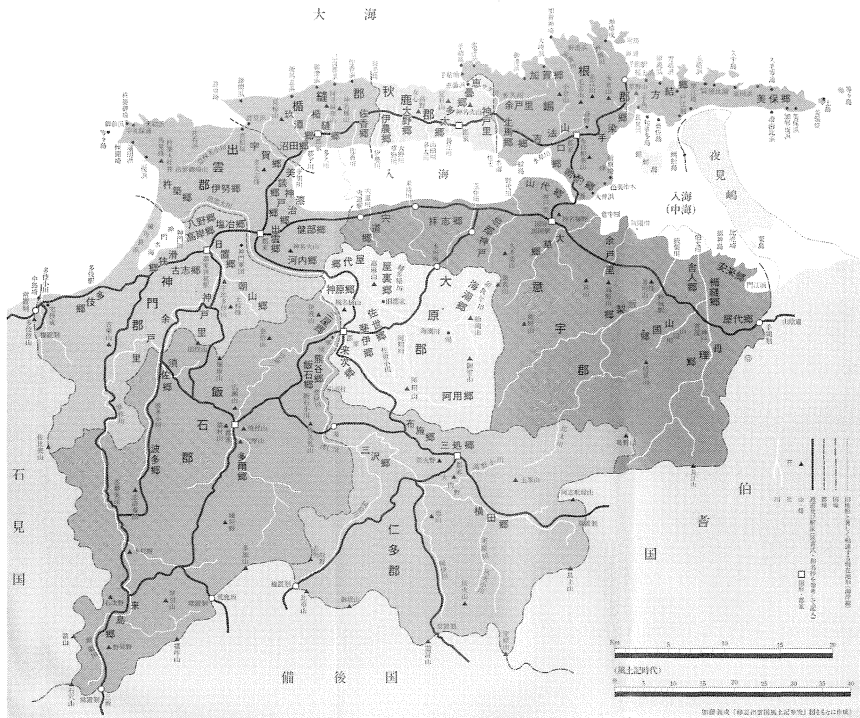
佐為神社（才地区）

倉）、宇由比社は現在の宇由比神社、伊自見社は現在の伊甚神社（伊志見）と考えられています。



穴道町内の『風土記』関連推定地（複数の推定地がある場所は併記）

1. 伊自美社（伊甚神社） 2. 佐雑埼、佐雑村 3. 穴道駅家 4. 穴道郷家 5. 穴道社（氷川神社） 6. 猪石（女夫岩） 7. 狹井社、狹井高守社（佐為神社） 8. 穴道社（大森神社） 9. 穴道社、猪石、犬石（石宮神社） 10. 宇由比社（宇由比神社） 11. 来待橋 12. 支麻知社（来待神社） 13. 山田村（菅原地区） 14. 和奈佐山 15. （和奈佐神社） 16. 幡屋山（馬鞍山） 17. 木垣峰（八重山） 18. 木垣坂（遠所越）



『出雲国風土記』地図

■ 中世・近世の歴史体験ゾーン

③⑤

えんやはんがんだかさだ

塩冶判官高貞の碑

塩冶判官高貞（出雲国守護）は
 後醍醐天皇を助け、室町幕府（1336～
 1573）を成立させた功労者として室町
 幕府に重んじられました。しかし、
 高師直との争いにまきこまれ、京から
 のがれて本国の出雲へ帰る途中、宍道
 の白石周辺で自害したと言われます。
 現在、宍道中学校の南側には塩冶判官
 高貞の首塚と伝えられる石碑が残され
 ています。

【参考】宍道町史



塩冶判官高貞の碑

③⑥~③⑧⑤⑧

やまじろ

山城

山城は山頂や山腹に築かれた城のことです。戦国時代（15世紀中ごろ～16世紀終わりごろ）には全国的に数多く造られました。普段はふもとで生活し、戦争が始まると山城にこもったようです。鉄砲が広まるとねらい撃ちされる山城は姿を消し、松江城のような平城に変わっ

ていきます。

かなやまようがいさんじょう
[金山要害山城]

金山要害山城（坂口要害山城ともよばれている）は、坂口地区と金山地区にまたがる丘陵の先端を削ってできた城跡です。出雲国守護京極高氏の孫の秀益が城を築いて宍道八郎と名のつた応仁年間（1467～1468）ごろより、この地方で勢力を誇った歴代宍道氏の根拠地でした。

ひょうこう 標高148mの山頂には「詰成」とよばれる平坦な所が広がり、ここからは宍道湖や北山一帯の山々が手にとるように見えます。また、金山要害山を支える城と言われる宍道要害山や、佐々布要害山はすぐ近くにあり、さらにとびがすじょう 鷹ヶ巣城（出雲市ひがしはやしぎ 東林木町）と行動をとるにもする戦略上もよい位置にあります。

さそうようがいさんじょう
[佐々布要害山城]

佐々布中地区の国道54号線に面する丘陵上に築かれた山城です。金山要害山と宍道要害山との中間に造られており、佐々布川ぞいにさか



金山（坂口）要害山城

のぼって侵入しようとする敵に備えるには、格好の位置をしめています。

しんじょうがいさんじょう
[宍道要害山城]

宍道駅の西側にのびる丘陵上（宍道要害山公園）に築かれた山城です。宍道湖に面して築かれていることから、宍道湖上の水運の警備にあたり、湖水を利用して攻めてくる敵に備えるために格好の位置といえます。



宍道要害山城（→）と佐々布の谷

MEMO

古城にはさまざまな言い伝えがあります。金山要害山のしんじまさよし ちやうしゅう（今の山口県）に移った際に、宍道のあずきや 小豆屋に自分の娘とともにたち きんらん 太刀と金襴のうちかけ 打掛（のちに袈裟に仕立てて豊龍寺に寄進）を預けたといういつわ 逸話や、城がなくなる際にしろつばさ 白椿の下にざいほう 財宝を埋めたというひょうろうぜ 白椿伝説、兵糧攻めの際に灰と小豆をまぜて馬を洗って見せたという「馬洗い伝説」などが語りつがれています。

【参考】 ふるさと文庫5、宍道町史

③⑨～④① ^{いじみ}伊志見一里塚（国指定文化財）

〔山陰道〕 山陰道という名称は古代にさかのぼります。宍道町は古くから交通の要衝でしたので、山陰の東西を結ぶ幹線が整備され、山陰道と呼ばれました。宍道町内では『出雲国風土記』に記述された古代の山陰道跡は見つかっていませんが、江戸時代に整備された山陰道は部分的に残っています。

〔伊志見一里塚〕 一里塚は街道の両側^{かいどう}に 一里^{いちり}（約 4 km）ごとに設けられた塚のことです。多くはその上^{えのき}に榎や松を植えて旅人の目印としました。戦国時代^{せんごくじだい}の終わりごろにはすでに用いられていましたが、1604年^{けいちょう}（慶長 9 年）、幕府^{ばくふ}の命令により東海道^{とうかいどう}をはじめとする主な街道で整備されるようになりました。しかし、明治時代^{めいじじだい}にはいと、交通機関の発達や、道路の拡張などにより、徐々に取りのぞかれていきました。

^{さんいんどう}山陰道にも一里塚が設けられましたが、そのなごりの一つが伊志見一里塚です。伊志見一里塚は松江城下から 5 里（約 20km）の地点にあります。

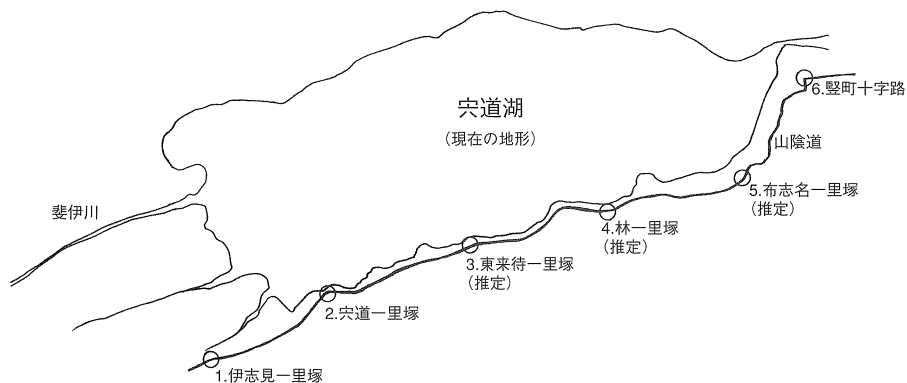
塚は旧道をはさんで南北にあり、北塚は直径約 5 m、高さ約 2 m です。南塚は直径 6 m、高さ 2 m です。

松江までの間にはまだ 3 ケ所の一里塚があったはずです。伊志見一里塚の東約 4 km（現雲南石油の横）には「一里塚」の地名が残っています。

島根県下では、この伊志見一里塚、
 安来一里塚（安来市安来町）、出西・
 伊波野一里塚（斐川町出西・伊波野）
 の三つが国指定文化財として保存さ
 れています。



伊志見 1 里塚（昭和11年9月）



江戸時代の山陰道と一里塚（○印一里塚）

■ 文化財体験ゾーン

④2 こわたけじゅうたく 木幡家住宅（国指定文化財）

宍道は昔から山陰の東西と奥出雲・山陽地方をつなぐ交通の分岐点^{ぶんきてん}として栄え、江戸時代^{えど}には大名や、その家臣^{かしん}たちが立ち寄り宿泊する本陣宿^{ほんじんやど}をもつ宿場町^{しゆくばまち}として発展しました。本陣宿の一軒が木幡家で、その住宅は当時のようすを今に伝えています。

木幡家住宅（八雲本陣）は宍道の中心部にあって、旧山陰道に面しており、歴代の松江藩主^{まつえはんしゅ}が藩内^{はんない}を見まわるときや、出雲大社^{いずもたいしゃ}にお参りするときなどに、家臣たちとともに宿泊する本陣宿をつとめました。

住宅は二階建の大型住宅で、街道に面する外観は白壁です。中に入ると白庭^{うすにわ}と呼ばれる広い土間があり、左側の奥には松江藩主が居間^{い ま}として利用した書院^{しよいん}が残されています。

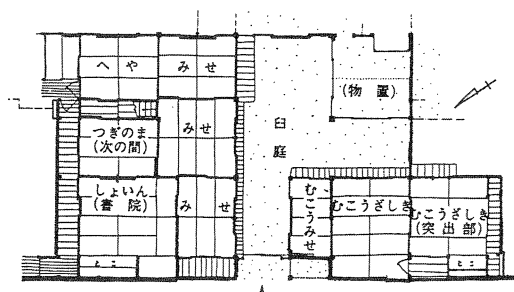
江戸時代の家屋を代表する貴重な資料として、昭和44年6月20日、国の重要文化財（建造物）に指定されました。



木幡家住宅（八雲本陣）



木幡家住宅の内部



正面

木幡家住宅の平面図

【参考】 宍道町史

④③ ^{でんいずもしゅつどうたく}伝出雲出土銅鐸〔木幡家銅鐸〕（県指定文化財）

銅鐸は^{やよいじだい}弥生時代に使用された^{せいどうき}青銅器で、上部から下部にかけて、すそ広がりになっています。上部には半円形のつまみがつき、身の両側に薄いひれがついています。小さいものは高さ10cm前後ですが、新

しくなるにつれて次第に大きくなり、1 mに^{およ}及ぶものも現れるようになりました。^{きんき}近畿地方を中心に、東は中部^{ちゅうぶ}地方から西は北九州まで^{ぶんぶ}分布しています。^{こうじんだに}斐川町の荒神谷遺跡や加^{かもいわくら}茂町の加茂岩倉遺跡からは多数の銅鐸が見つかっています。



木幡家銅鐸（左）と吉野ヶ里銅鐸（右）

菟古館に展示されている伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）は、出雲地方から見つかったと考えられています。高さは約28cm（復元高）とやや小型ですが、銅鐸の中では古い型のものです。目の文様が描かれているところから「^{じゃしもんどうたく}邪視文銅鐸」、あるいは「^{へきじゃもん}辟邪文銅鐸」とも呼ばれています。目は^{もの}物の怪を^け追い払うもの、その下に描かれているサギのような鳥は、豊作をもたらす神の使いとして描かれたものだろうと考えられます。

伝出雲出土銅鐸のような目の文様をもつ銅鐸は、中国地方で4例知られる謎の銅鐸でしたが、佐賀県の^{なぞ}吉野ヶ里^{よしのが}遺跡から伝出雲出土銅鐸と同じ^{いがた}鋳型で作った銅鐸が出土し、周辺からもよく似ている鋳型が出土したことから北部九州で作られたことが分かりました。

【参考】 宍道町史

④⑥ ひうんかく 飛雲閣 (町指定文化財)

明治40年5月、大正天皇が皇太子のころ、山陰の各地を訪ねられました。松江城内にある興雲閣や、宍道木幡家にある飛雲閣は、皇太子一行の宿泊、休憩のために用意された建物です。

飛雲閣は間口9.1メートル、奥行き8.2メートルの建物で、当時としては最高級の建築物です。



飛雲閣

④⑦ もくぞうびしゃもんてんりつぞう 木造毘沙門天立像 (町指定文化財)

毘沙門天立像は、下白石の鞍馬寺に安置されています。この像は806年（大同元年）、京都の鞍馬寺にあった毘沙門天におまいりし、分霊像を持ち帰ったと伝えられています。江戸時代になると、お堂とともに像もいたんできたため、1729年（享保14年）に寺主の大用は京都で新しく作られた像を持ち帰り、旧像とともに山上の奥の院にまつ

ったということです。

昭和30年に島根県文化財合同調査
が実施されたおり、奥^{おく}の院^{いん}の古い像
は伝承どおり平安末期^{へいあんまつき}の作と鑑^{かん}定^{てい}さ
れました。それにともない像^{しょう}の補^ほ修^{しゅう}、
補^ほ強^{きょう}がなされ、下のお堂に安置され
るようになりました。



木造毘沙門天立像



木造阿弥陀如来像

④⑧ もくぞうあみだによらいぞう
木造阿弥陀如来像

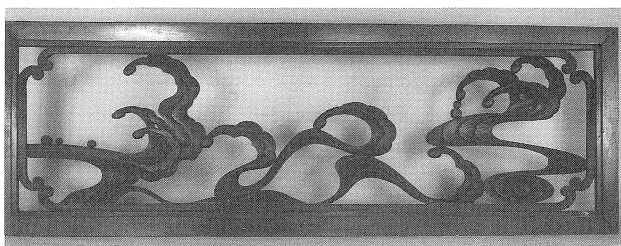
(町指定文化財)

木造阿弥陀如来像は、浜東地区の小
さなお堂にあり、もともとは来迎寺と
呼ばれる大きなお寺の仏像であったと
伝えられています。

像は高さ80^{れんげだい}センチの木像で、蓮華台と呼
ばれる台座の上に乗っており、鎌倉^{かまくら}時
代に作られたと言われています。

④⑨ もくぞうはとうもんすかしぼりらんま
木造波濤文透彫欄間（町指定文化財）

宍道町内の古川克明さんのお宅には、波の模様を彫りだした大変りっぱな木製の欄間が残されています。もともと津和野町の旧家に伝わったものです。津和野町は、戦国時代に現在の山口市を中心に芸術・文化を発展させた大内氏と関係が深いことから、この欄間も大内氏の文化の影響を受けた物かもしれません。

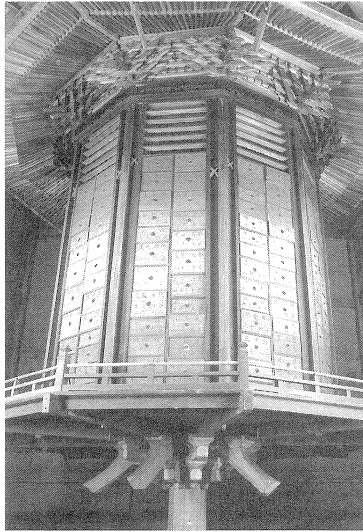


木造波濤文透彫欄間

⑤⑩ りんてんしきいつさいきょうぎょうぞう
輪転式一切経経蔵（町指定文化財）

記録によると、江戸時代えどの中ごろに雲松寺住職うんしょうじゆうしやくの恵運和尚えうんおしょうは一切経（仏教の教えをまとめた教典）をもらいうけ、その後、輪転式経蔵きしんの寄進を受けてお経を安置したとされています。

現在、経蔵は土蔵に納められており、外部の風雨から守られています。中の輪転式経蔵は高さ3.5m、周囲6.8mです。上部の周囲10角には般若心経はんんにゃしんぎょう600巻、下部に3,100巻余りの経文が納められています。



輪転式一切経蔵

⑤⑤ ^{しんじいよのかみいぶつくじょうおおげさ} 宍道伊予守遺物九条大袈裟、^{さんじょうむねちかめいたち} 三条宗近銘太刀
(町指定文化財)

[宍道氏について]

宍道氏は^{いずものくにしゆごきょうごくたかうじ}出雲国守護京極高氏の孫、^{ひでます}秀益が「^{しんじはちろう}宍道八郎」と名乗ったことに始まります。^{むろまちばくふ}室町幕府の中で役職をつとめながら、^{せんごくだいみょうあまこし}戦国大名^{しんせき}尼子氏の親戚となり、尼子氏の有力家臣として大きな勢力をもっていました。宍道氏一族には「宍道八郎（本家）」を名乗る家系のほかにも「宍道六郎」、「宍道九郎」と称する家系があったことが知られています。

1542年（天文11年）に、長州（今の山口県）の大内義隆が尼子氏を攻めるために出雲に進出してくると、宍道隆慶（八郎家）は大内氏に従いますが、尼子攻めが失敗に終わると隆慶は大内氏とともに長州に移りました。そのあと、大内氏がほろぶと毛利氏に従い、再び尼子攻めに加わります。1566年（永禄9年）、尼子氏が敗れると、宍道隆慶、政慶親子は毛利氏により、もとの領地を与えられ、金山要害山周辺を拠点として、他の宍道一族や周辺の武士を支配するしくみをつくりました。

宍道政慶は1592年（天正20年）ごろ、毛利氏の政策により長門国阿武郡（今の山口県）に移されており、豊臣秀吉の朝鮮出兵のときには、新しい領地から出兵したことが知られています。

しんじいよのかみいぶつくじょうおおげさ
[宍道伊予守遺物九条大袈裟]

現在、金山の豊龍寺に金襴の袈裟が寺宝として残されており、それにまつわる興味深い話があります。それは、宍道政慶が天正20年ごろ、長州に移る際、宍道の小豆屋（現当主小豆沢七生氏）へ3歳になる一人娘を預け、その証拠として「太刀」と「金襴の打掛」を残した



宍道伊予守遺物九条大袈裟と三条宗近銘太刀
(1989年、金山地区の豊龍寺で約400年ぶりに対面した)

のですが、小豆屋は城主の娘を世継ぎとし、娘が成人すると「金欄の打掛」を袈裟にしたてなおし、宍道氏の菩提寺である豊龍寺に寄進したということです。これが現在も残っている金欄の大袈裟です。

袈裟は唐の織物で、金欄の布切れ74枚で仕立てられ、たての一方が132cm、もう一方が116cm、よこ212cmの金色のまばゆいものです。

(宍道政慶は備前守と称し、文化財につけられた伊予守を示す史料はありません)

[三条宗近銘太刀]

二つの品のうち、「打掛」は袈裟に仕立てられ豊龍寺に寄進されましたが、太刀は小豆屋の子孫の小豆沢家に伝わりました。刀は長さ74.2cmで「三条宗近」の銘が切っております。製作年代は室町時代と考えられています。

⑤9 菅原道真と天神さん

菅原地区にある菅原天満宮と菅原梅の木教会では、菅原道真（845年～903年）の出生を伝えています。それによると菅原道真の父、是善が出雲に勤めていたとき、菅原氏の祖先の野見宿禰の墓を訪ねて菅原の里に来られたおり、そこで接待をし



菅原天満宮

た娘が気にいり、出雲
 国^{おおくさちよう}庁(今の松江市大草町)
 へ召し出されました。
 是善は勤めの期間を終
 え、京都の都に帰るこ
 とになりますが、この
 ときすでに女性^{かいにん}は懷妊
 しており、菅原の地に



菅原梅の木教会

帰って男の子を生みました。これが菅原道真だと伝えられています。

道真^{うだ だいご}は宇多、醍醐^{うだいじん}の両天皇の信任を得て、右大臣にまで進みました
 が、その当時の権力者^{ふじわらのときひら}の藤原時平^{ちゅうしょう}の中傷により、太宰権帥^{だざいのごんのそち}として九州
 の太宰府^{だざいふ}にうつされ、その地^{しょうがい}で生涯を終えました。

のちに、道真のたたりとする自然の災害が続いておこったため、こ
 れをしずめるために神格化^{しんかくか}されていきます。そして道真が学問をよく
 したことから、「学問の神 天神さん」として全国的に信仰を集めました。

菅原地区の菅原天満宮は道真をまつる神社で、951年に建てられた
 と伝えられています。祭日は3月25日と8月25日です。

松江藩主^{まつだいらなおまさ}の松平直政以来、代々藩主^{はんしゆ}の信仰が厚く、『雲陽大数録』^{うんようだいすろく}
 では出雲国内の名社15のうちの一つに数えられています。扉には松江
 藩のお抱え絵師^{えし}、狩野永雲^{かのうえいうん}が双龍^{そうりゅう}を描いています。

近くには「鼻繰^{はなぐりのうめ}梅」という伝説の木があり、道真が子供のころに遊

んだものと伝えられています。

【参考】宍道町史

⑥1 ^{みょうがんじ} 妙岩寺

妙岩寺は大字佐々布本郷にあり、山号を^{きかくざん} 亀鶴山と言います。国道54号線からおよそ50m入り、数十段の石段を上ると老木がこんもりとしげり、景色のよいところです。

寺の建物は1821年（^{ぶんせい} 文政4年）に改築され、高さ約15mの本堂は^{ほんどう} 1986年（昭和62年）に改築を終え、なおいっそう^{おごそ} 厳かなようすを極めています。本尊は^{はぶきあみだによらい} 齒吹阿弥陀如来で、全国でも数少ないものと伝えられています。

^{けいだい} 境内は三方が緑でおおわれ、庭園は自然の地形を利用して^{こけ} 苔の色が豊かで、訪れる者の心にうるおいを感じさせます。

また、高くそびえ
たっている岩壁に
^{どうくつ} 洞窟が掘りこまれて
いますが、その中に
^{じゅうろくらかんぶつ} は十六羅漢仏がたた
ずんでいます。



妙岩寺の十六羅漢

宍道町のふるさと学習図書

【宍道町について調べる本】

ふるさと文庫シリーズ	主 な 内 容
1、宍道湖の漁具・漁法	宍道湖の漁具や漁法について説明
2、宍道町の文化財めぐり	宍道町内の主な文化財を紹介
3、来待石の採石と加工	来待石の歴史、採石方法、加工方法を説明
4、宍道町が海だったころ	宍道町の地質について説明
5、宍道町の山城	宍道町内の主な山城を紹介
6、宍道町の中世時代	宍道町の主な古墳を紹介
7、宍道の町並みスケッチ	江戸時代以来の宍道町の町並みについて解説
8、石と人	来待石と人々の関わりについて紹介
9、宍道湖のおいたち	宍道湖がどのようにして出来たのかを解説
10、宍道を訪れた旅人伝	宍道町を訪れた著名人を紹介
11、女夫岩遺跡を考える	古代の祭祀遺跡である女夫岩遺跡について解説
12、古代の道・現代の道	道の町宍道町を古代から現代にわたって紹介
13、出雲国風土記からみた宍道町	出雲国風土記に記された古代の宍道町を紹介
14、鉄と人	宍道町でも鉄が作られていたことを紹介
15、宍道町の四季を詠む	宍道町の四季折々を俳句で紹介
民間歴史グループの出版物	主 な 内 容
わたしたちの昭和（前期）	昭和時代の体験記、昭和初期～20年代まで
わたしたちの昭和（後期）	昭和時代の体験記、昭和20年代～64年まで
聞き書ふるさと西来待	西来待地区の歴史、伝承の記録集
伝承ししぢの里	宍道地区の歴史、伝承の記録集
きまち書留帳	来待地区の歴史、伝承の記録集

【町の歴史を総合的に調べる本】

町史関係	主 な 内 容
宍道町史（史料編）	中世以前の宍道町の史料を集めた史料集
宍道町史（通史編上巻）	戦国時代以前の宍道町の歴史を描く
宍道町史（通史編下巻：予定）	江戸時代以降の宍道町の歴史を描く
古文書目録Ⅰ（来待地区、行政）	来待地区、合併前の役場の古文書目録
古文書目録Ⅱ（宍道地区、寺社）	宍道地区、寺社の古文書目録

【町の歴史をさらに詳しく調べる本】

宍道町歴史史料集シリーズ	主 な 内 容
1、歴史史料集（中世編）	宍道町の中世の史料集
2、歴史史料集（古墳時代編）	宍道町古墳の史料集
3、歴史史料集（地名編）	宍道町の小字を全て紹介した史料集
4、歴史史料集（近世編 本陣史料）	木幡家に伝わった本陣関係の史料集
宍道町歴史叢書シリーズ	主 な 内 容
1、歴史叢書 1（来待石研究Ⅰ）	来待石についての研究
2、歴史叢書 2（歴史の道研究）	宍道の道についての研究
3、歴史叢書 3（町史研究Ⅰ）	町史を作るために行われた研究
4、歴史叢書 4（町史研究Ⅱ）	町史を作るために行われた研究
5、歴史叢書 5（町史研究Ⅲ）	町史を作るために行われた研究
6、歴史叢書 6（町史研究Ⅳ）	町史を作るために行われた研究
7、歴史叢書 7（町史研究Ⅴ）	町史を作るために行われた研究
来待ストーン研究シリーズ	主 な 内 容
1、来待ストーン研究 1	来待石に関わる研究
2、来待ストーン研究 2	来待石に関わる研究
3、来待ストーン研究 3	来待石に関わる研究
4、来待ストーン研究 4	来待石に関わる研究

（平成14年3月現在）

MEMO

[illegible]

MEMO

This image shows a full page of primary-ruled paper. It consists of multiple horizontal rows, each defined by two parallel dotted lines. The rows are evenly spaced and cover the entire area of the page, providing a guide for handwriting practice. There are no margins, text, or other markings on the paper.

MEMO

[illegible]

編集関係者一覧

監修 安部 登
宍道幼稚園
尾原伸子 稲村智子
来待幼稚園
重本桂子
宍道小学校
山根明美 足立恵子 角折拓士 山田恵子
来待小学校
長澤一夫 伊藤雅美 安部裕子 林木照枝
宍道中学校
佐藤幸子 小山隆人 高木ちひろ 新宮桃子 宮崎智明
大野原分校
宮崎圭司 藤原 保 山本史郎
わかたけ学園
布野あけみ 伊藤裕美子 中村千広 藤井淑美 高橋 博
教育委員会
稲田 信

宍道町ふるさと文庫16

ふるさと探検ブック

2002年3月31日発行

編集 宍道町教育研究会
(ふるさと教育部)

監修 安部 登

発行 宍道町教育委員会

八東郡宍道町大字昭和1番地

印刷 柏木印刷株式会社

松江市国屋町452-2

氏 名

穴道町教育委員会

